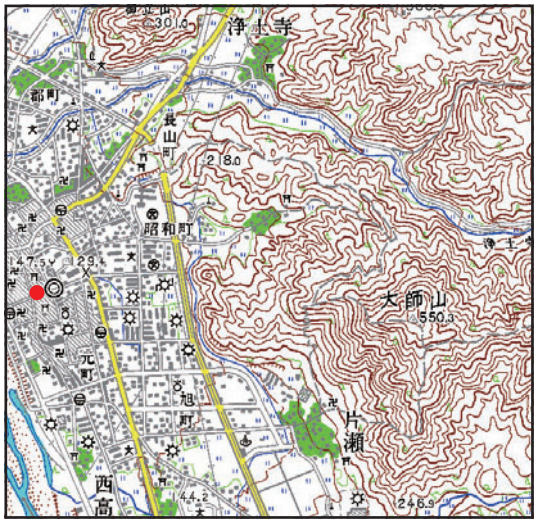
4．勝山城跡（かつやまじょうあと）・袋田遺跡（ふくろだいせき）

所 在 地：勝山市本町３丁目
調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業
調査期間：令和２年５月１日～令和２年 10 月 31 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：996 ㎡
時　　代：弥生・平安・中世・近世



位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　勝山城跡・袋田遺跡は、九頭竜川右岸の河岸段丘上に所在します。令和２年度は、令和元年度の２つの調査区に挟まれた部分を３分割して発掘調査を実施しました。本町通りの東側を３－１区、西側を３－２区、３－２区の西側を４区と呼称し、３－１区と３－２区、４区東端では２面、４区中央から西側部分で４面の遺構確認面を検出しました。

遺構　３－１区では、石組井戸７基、素掘り井戸１基、石積遺構５基、溝１条のほか、土坑や小穴約 120 基、石列などを検出しました。石積遺構４基は地面を四角く掘り込んだ四方の壁に河原石を３～６段積み上げるもので、年間を通じて一定である地下の温度を利用した食料などの貯蔵施設と考えられます。また調査区東側では、軟らかい地盤を強化するため、多数の川原石を使って地盤改良工事を行った跡が認められました。

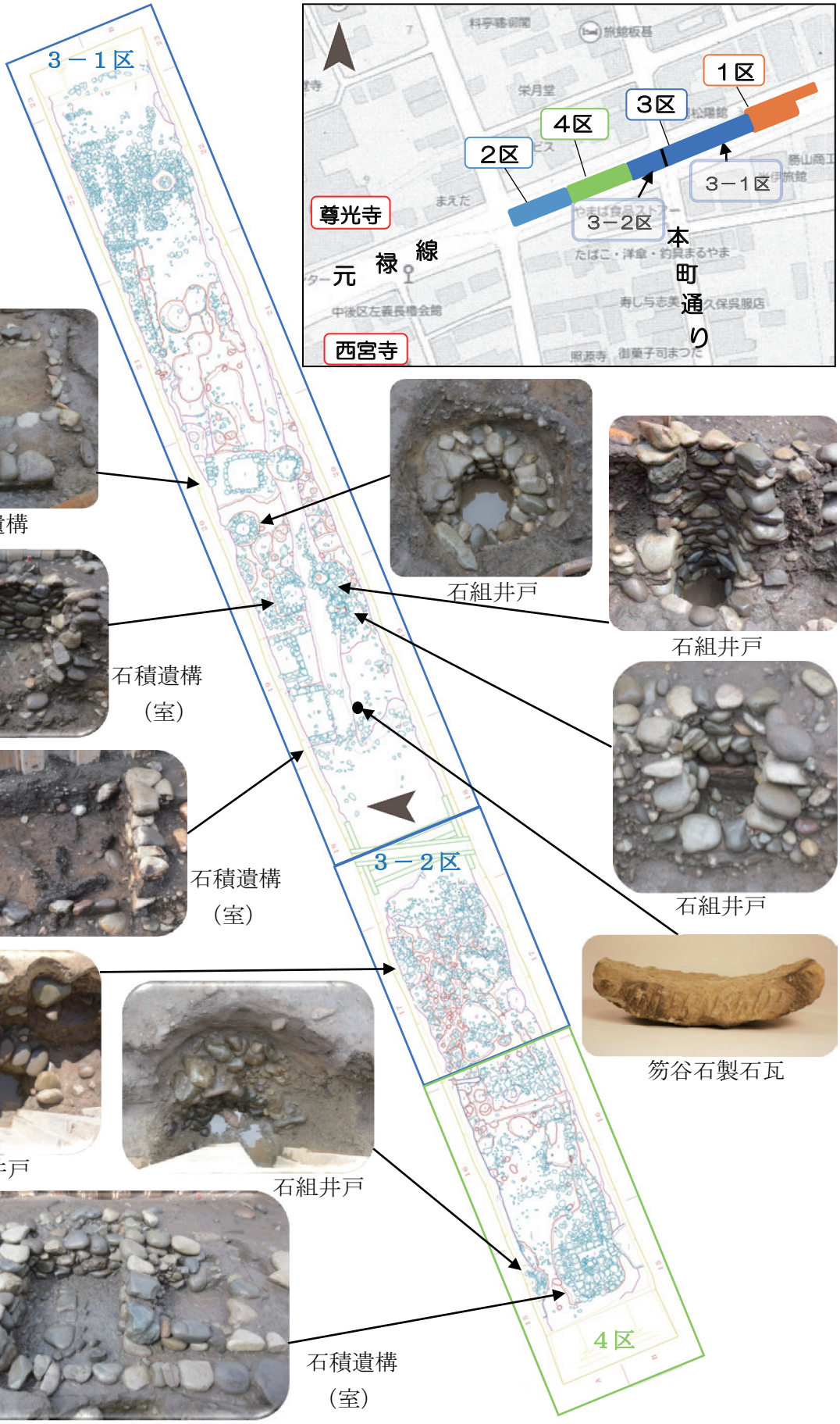
３－２区は 100 ㎡に満たない小さな調査区ですが、遺構密度が非常に高く、石組井戸２基、土坑や小穴約 90 基などを検出しました。小穴のなかには柱痕が認められるものもあり、沈下を防ぐため柱痕の底部に地山の石が当たるようにする工夫もみられました。

４区では、石組井戸３基、石積遺構３基、溝４条、自然流路２条、土坑や小穴約 180 基、石列などを確認しました。西端にある石積遺構の南東角からは石組の溝が東西方向にのびており、その傾斜から水が溝から石積遺構に流れ込むようになっていたと考えられます。また、小穴のなかには、柱根が残るもの７基や、根石があるもの２基などが認められました。

遺物　今回の調査では勝山市域で初めて出土したものが２つありました。それは笏谷石製の石瓦と付札木簡です。石瓦は城郭の主要な建造物にのみ葺かれた特殊な遺物であり、その出自が注目されます。また木簡は「六百入」と判読でき、品物の数を示すと推測されます。

遺物は、かわらけや青磁・染付・唐津・瀬戸美濃・越前焼などの陶磁器類が大半ですが、４区では平安時代の須恵器や弥生土器片がわずかに出土しています。このほか、角間石、石臼・バンドコなどの石製品、釘や銭貨などの金属製品、胴木などの木製品もみられました。

まとめ　１面目では近世の勝山城下町の町屋、２・３面目では中世の袋田村、４面目では平安時代以前の集落に伴う遺構・遺物を検出しました。特に、川原石を多く使った遺構(井戸や石積遺構など)が目立つことが特徴としてあげられ、勝山における石の文化の奥深さが感じられる調査となりました。　（藤本聡子）


３－１区
３－２区
４区
1区
3区
4区
2区
3−1区
3−2区
尊光寺
西宮寺
本町通り
元禄線
石積遺構
石組井戸
石積遺構（室）
石組井戸
石積遺構（室）
石組井戸
石積遺構（室）
石組井戸
笏谷石製石瓦